

音の散歩路

— オペラシティ界限 —

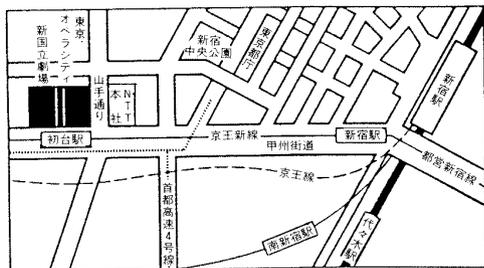
昨年の秋、新宿区と渋谷区にまたがる一画に音楽の街が誕生した。地上202メートルの都庁の展望室から見渡すと一望できる(写真-1)。

JR 新宿駅南口地下に位置する京王新線で一駅の初台駅前に、新国立劇場(渋谷側)と東京オペラシティコンサートホール(新宿側)と東京オペラシティコンサートホール(新宿側)がオープンした。京王線は初台には止まらないので注意が必要だ。

以前から一般に“オペラシティ”と総称で呼ばれ、完成した現在でもオペラの劇場はいったいどっちなんだと混乱をきたしている向きもある。オペラと冠されているが東京オペラシティコンサートホールはシンフォニー専用であり、新国立劇場の方がオペラハウスである。

写真-1の高い建物が54階234メートルの東京オペラシティのタワー、その向こうに地上5階地下4階の新国立劇場が建設された。手前のビルは127メートルのNTT本社ビルである。

地下駅である初台の地上に標識に従って顔を出すと、すぐ国立劇場の正面が目飛び込んで来る(写真-2)。大中小3つの劇場からなるが、1810席の大劇場をオペラ劇場と名付けている。



玄関扉を開いてホワイエに足を踏み入れる(写真-3)。中劇場への案内が目に入る(写真-4)。



写真1

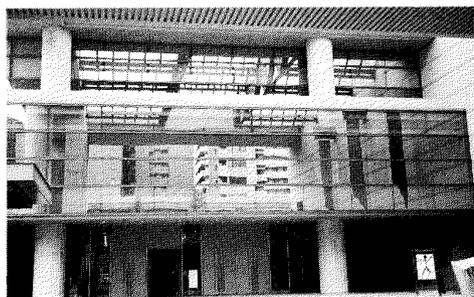


写真2

近代的な空間が広がり、木を多用した壁面が安らぎを感じさせる。タッチパネルで演奏会の案内や劇場の情報が得られるコーナーもある(写真-5)。触れてみるとベートーベンの生家の壁石の映像が現れた(写真-6)。天皇皇后両陛下が1993年9月ドイツ親善訪問の際贈られたもので、新国立劇場の開場を記念して賜わったものという。一般公開されていない。映像の対面だけでは興味半減で至極残念。他にも情報センターがあり音楽関係の資料閲覧やオペラやバレエを中心としたビデオディスク、ビデオテープを

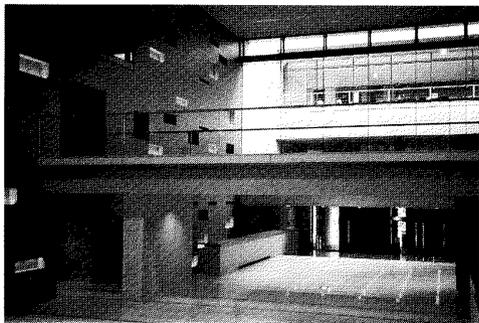


写真 3



写真 5

鑑賞できる(写真-7、8)。

再び玄関扉を出て左手方向を見ると、水面の向こうにギャラリーの空間が目に入る(写真-9)。ギャラリーは左側の新国立劇場と右側の東京オペラシティを分けるように配置されている(写真-10)。

東京オペラシティの方には大小2つのホールがある。大ホールは3階のタケミツメモリアルであり、1632席のコンサートホールである(写真-11)。同じく3階には地権者の一人がコレクションした画家であり詩人でもある故難波田龍

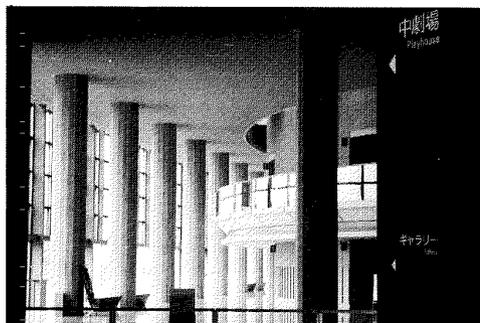


写真 4

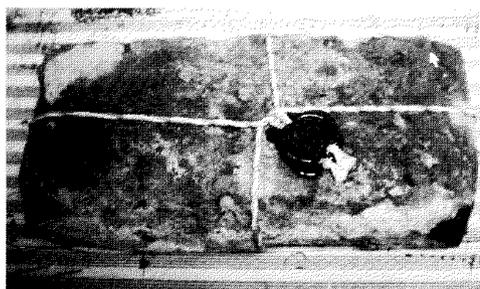


写真 6



写真 7

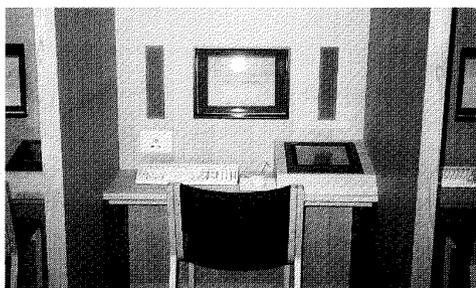


写真 8



写真 9

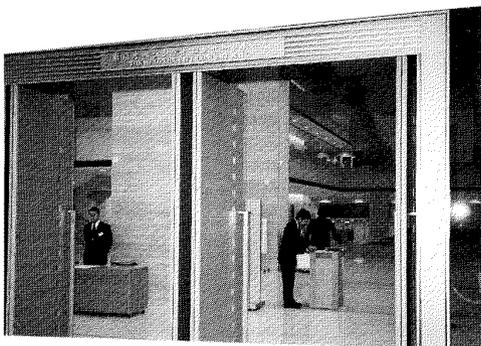


写真 11



写真 10



写真12

起氏の作品を展示した難波田展示室がある（写真-12）。東京オペラシティの隣地では、アートミュージアムが1999年秋オープンに向けて建設中でもある。4～6階には科学技術と芸術文化の対話をテーマにした次世代型ミュージアム・NTTインターコミュニケーションセンターがある。無響室で自分の体内音と増幅した体内音との二つの音のズレを聴かせるものなどメディアアート、テクノロジーアート関連の興味深い展示が体験できる。

オペラシティの北手に廻ると幡ヶ谷不動尊に通じる不動通りがある。散策するとタワーをバックに倉庫然とした音楽スタジオがあったり、凛とした庭園と江戸時代の常夜燈や芭蕉の句碑を擁した荘厳寺が意表をつく（写真-13、14）。

反転して西新宿方面に足を延ばし、都庁を右手に見ながら新宿中央公園裏手の路沿いを歩くと天然温泉の十二社がある（写真-15）。東京在住の方は黒塀に囲まれた割烹旅館街を御記憶の向きも多いかと思う。中央公園の一画には十二

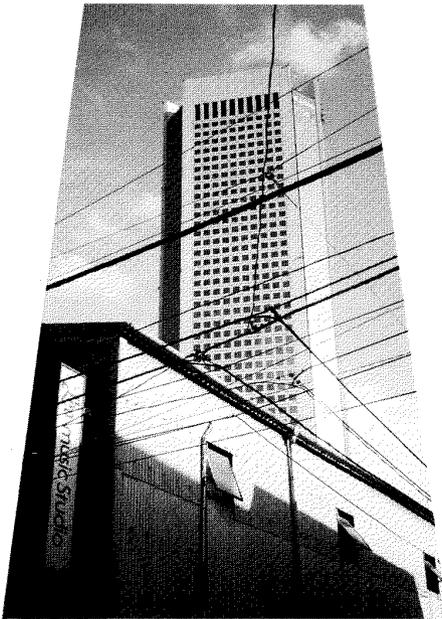


写真13



写真14

社熊野神社がある。室町時代の長者鈴木九郎の故郷である紀州熊野の十二所権現をうつし祠ったものと伝えられ、十二社の語源になっている。神社の右側の木立の中では滝を模した水音に出会える(写真-16)。江戸時代中期より十二社周辺は池や滝がある景勝地であり、釣りやボート

漕ぎなどを楽しんだという。しかし、淀橋浄水場の工事で滝が埋め立てられ、昭和43年には都市化に伴い池が埋め立てられ様変わりしてしまった。散策しながら当時の環境が残されていれば…との思いが時折かすめる。(財団 江沢記)



写真15

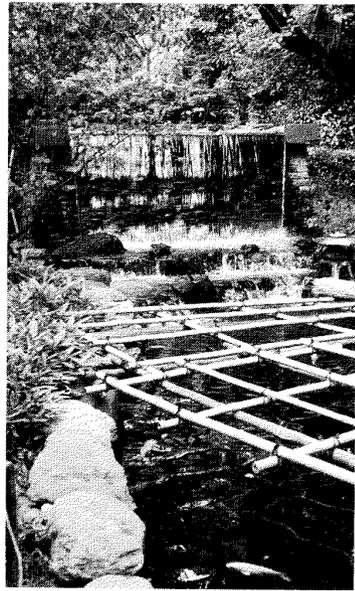


写真16